What

2

学校教育目標のあり方を考える

自校の現状分析で把握した課題を基に、生徒の将来を見据えた教育目標を設定

森教授の講演を通じてカリマネの理解を深めた後は、実践事例として、「読解力」の育成を軸にカリマネを進めている静岡県立御殿場高校の美那川雄一先生が、課題意識を持ったきっかけや教育目標の設定において大事にした視点、他教師を巻き込んだ取り組みに発展させた過程などを語った。講演後には、参加者によるグループワークと美那川先生への質疑応答が行われた。

静岡県立御殿場高校 教諭
美那川雄一
みながわ・ゆういち

教職歴15年。同校に赴任して2年目。1学年主任。担当は地理歴史・公民科（世界史）。

動画はこちら

「教科書の文章を読めていないのではないか」という課題認識

本校では、生徒への育成を目指す資質・能力として「読解力」を掲げ、カリマネを進めています。まずは、その背景を紹介します。

本校は、工業・商業・家庭の3科を擁する静岡県内唯一の専門高校で、2018年度から、創造工学科、創造ビジネス科、生活創造デザイン科の3学科を設置しています（＊1）。生徒数は約600人。卒業後の進路は、57％が就職し、28％は専門学校へ、15％は大学・短期大学へと進学します（17年度）。地元企業に就職する生徒が多いため、資格取得に力を入れるとともに、社会で役立つ資質・能力を育成しています。

17年4月に本校に赴任した私が課題意識を持ったのは、授業を開始して1か月が経った頃です。担当の世界史の授業中、教科書に記載された事項について私が発問しても、生徒の手が全く挙がらず、「もしかして、生徒は教科書の文章を読めていないのではないか」と感じました。

そこで、生徒には教科書の文章を正確に読み取る力が不足しているという仮説を立て、国立情報学研究所社会共有知研究センターが考案した読解力テスト「リーディングスキルテスト」（以下、RST）のサンプル問題（「リーディングスキルテストの実例と結果」〈平成27年度実施予備調査より〉）を、1年生全員に解かせてみました。

すると、正答率は、全国公立高校の平均正答率を下回っていました。数問解いただけでは確かなことは言えないかもしれませんが、生徒が教科書の文章を正確に読み取れていないのなら、授業の内容を理解していない可能性が高く、教師の口頭での説明も十分に伝わっていないかもしれない。そうであれば、授業を根本的に見直すことが必要だと考え、校長にRSTの結果を示して相談しま

＊1　2019年度の3学年は、情報システム科、情報ビジネス科、情報デザイン科の3学科。
＊ プロフィールは2019年3月時点のものです。

した。すると、「3年生の読解力はどうですか」と質問をいただきました。そこで、3年生にも同様に問題を解かせてみたところ、3年生の平均正答率も、全国公立高校の平均値より低い結果でした。

その頃、職員室でも、「生徒は、教科書の文章を正確に読めていないようだ」「資格試験の合格率が下がっているのは、問題文を読めていないからではないか」といった課題が挙がっていました。そこで、教師間でそれらの課題について共有し、対応策を検討した方がよいのではないかと考え、普通教科の担当教師による研修会を行いました。

教員研修を行い、読解力の育成を軸に教育目標を設定

研修会では、本校の生徒への育成を目指す資質・能力を見極めるため、日頃、教師が生徒を見ている中で感じていることを話し合いました。KJ法を用いて、学校や生徒の強みと弱みを整理したところ、暗記などは得意だけれども、読解力や語彙力、計算力が不足していることなどが、教師間の共通認識になっていると改めて分かりました。

その中でも注目したのが、すべての学力の基礎となる「読解力」の不足です。そこで、この「読解力」の育成をカリマネの軸に据えて、指導改善に着手しました。

生徒にとってより必要な教育目標へと近づける

次に取り組んだのは、生徒の将来を見据え、教育目標をより具体化することです。研修メンバーで、本校の生徒への育成を目指す「読解力」について話し合い、その定義を「文章を正確に読み取る力」と「情報を整理して理解する力」の2つにしました。企業では、マニュアルを「読んで」仕事を覚えなければならず、また、高校卒業後は、自分で本などを「読んで」学び続けることが、生徒には求められるからです（図1）。

そして、教育目標が変われば、授業も変えるべきだと考え、授業の見直しをしようとほかの教師に呼びかけて、12月に2度目の研修会を実施しました。そこでは、本校で育成を目指す「読解力」の定義を基に、どのように各学年・各教科でそれを育成するか、学年・教科を超えて話し合いました。

その際には、具体例があった方がよいと考え、地理歴史・公民科の学

図1 静岡県立御殿場高校の生徒に必要な資質・能力

読解力
- 文章を正確に読み取る力
- 情報を整理して理解する力

なぜ、読解力が生徒に必要なのか

❶生徒は、企業で働く際に、マニュアルを「読んで」仕事を覚えなければならない

❷生徒は、高校卒業後、自分で本などを「読んで」学び続けなければならない

読解力を身につけておかないと御殿場高校の生徒は、社会で成長できない！

＊美那川先生の講演資料を基に編集部で作成。

図2 地理歴史・公民科で育成を目指す資質・能力（例）

科目：世界史A
目的：「広い視野で考える力を育てる」
目標：「東京大学の世界史」の問題を解く

学びの方針（資質・能力の育成）

❶生徒は、150個だけ歴史用語を覚える→各時代の概念や各地域の特徴を理解〈知識・教養〉

❷生徒は、教科書の文章を正確に読み取り、情報を整理して書くことができる〈読解力・情報整理力・論述力〉

❸生徒は、自分の意見（論述）を他者の意見と比較し、よりよいものにつくりかえることができる〈対話力・省察力〉

◎重点学力：読解力　御殿場高校を卒業するまでに、新聞を読むことができるレベルの読解力を身につける

1年生 世界史A	→	2年生 日本史A	→	3年生 現代社会
教科書レベルの文章を読み、内容を正確に理解する		教科書レベルの文章を読み、内容を正確に理解する		新聞レベルの文章を読み、内容を正確に理解する

＊美那川先生の講演資料を基に編集部で作成。

びの方針を事前にまとめ、研修会で発表しました（**P.11図2**）。地理歴史・公民科では、本校を卒業するまでに、新聞の内容を理解することができるレベルの読解力を育成することを重点に掲げ、学年（科目）ごとの目標も設定しました。具体的には、生徒に教科書を読ませ、そこから考えられることを問う授業を展開しています。

18年度は、5教科中心の取り組みでしたが、19年度からは静岡県総合教育センターの協力を受け、工業科、商業科、家庭科の専門科目でも「読解力」の育成などの観点を意識した授業を推進していく予定です。

一方で、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、管理職が地域の後援会やPTAの方、企業の方を対象に、本校の生徒に求められる資質・能力をアンケートで調査中です。

また、生徒にも、自分たちに必要な資質・能力を考えてもらう場を設けました。参考にしたのは、『VIEW21』高校版の17年10月号に掲載されていた山梨県立吉田高校の取り組みです。生徒自身が自分たちに必要な資質・能力を考える会議を開催したという記事を読み、本校でも「御殿場高校の3年間で身につける『力』とは何か?」というテーマでのワークショップを行ったのです。

今後は、生徒自身が実感していること、地域が求めていることも意識し、「読解力」の育成などを軸にしたカリマネを学校全体で推進していきたいと思います。

参加者とのQ&A

動画はこちら

講演後、美那川先生の話を聞いて参加者が抱いた共感・違和感・疑問・不安をグループで共有。その内容を踏まえ、美那川先生と参加者との質疑応答が行われた。ここではその一部を紹介する。

Q 組織的な取り組みとして、学校全体にどのように広げたのでしょうか。

A 本校での取り組みは始まったばかりで、組織的に取り組んでいるというレベルではまだありませんが、外部機関との連携は鍵になると思います。本校では、18年度から、静岡県総合教育センターの支援を受けてカリマネを推進しています。

また、学校全体に広げるためのポイントとして、前任校の経験から考えられることをお話しします。

前任校では研修主任だった私は、学習評価に課題を感じ、静岡県のサイエンス・アドバンススクール事業（＊2）に参加し、授業改善を進めました。県からの支援によって、校内での理解が得られ、研修が進めやすくなりました。

研修の進め方で工夫した点は、3つあります。1つめは、教師参加型にしたことです。当時、若手教師だった私が、先輩の先生方を対象に講義形式とするのは難しかったため、先生方が話し合うグループワーク中心の研修にしました。

2つめは、研修報告のプリントを教師全員に配布したことです。研修の翌日に、研修内容だけでなく、笑顔で研修を受ける先生方の写真を掲載したプリントを作成し、職員室で配布しました。すると、参加できなかった先生も興味を持ってくれるようになり、次第に研修の輪が広がっていきました。現在、本校でも、同様のプリントを配布しています。

3つめは、研修推進に影響力を持つ先生たちに相談したことです。前任校では、生徒指導を熱心に行う体育科の先生方でした。学校のキーパーソンである先生方が率先して自分のような若手主催の研修に参加してくれると、多くの教師の研修への理解も進みやすくなると思います。

写真 各グループから出された美那川先生への質問をスライドに表示し、会場全体で共有した。

Q 教育目標を「読解力」の育成に設定後、どのように教科の授

＊2 静岡県教育委員会が、授業改善を軸とした生徒の学力、教師の授業力、学校の教育力を向上させるために県内の研究校を指定して推進した事業。

業内容を改善していったのですか。

A 図3は、G. ウィギンズとJ. マクタイが提唱している「逆向き設計」という考え方と文部科学省の考えを踏まえて、私が思案中の読解力に焦点をあてた授業設計の概念図です。

目標→評価方法→学習方法→学習内容という順に授業を設計していくことを示しています。私はその概念に基づき、授業案を作成しています。

具体的にはまず、①求められている教育の結果（教育目標）を決めます。本校の場合は、読解力の育成です。次に、②その結果がもたらされたことを証明できる証拠（評価方法）を決めます。本校の世界史の定期考査では、暗記だけで解答できるような問題を出していません。教科書の本文の抜粋を掲載し、そこから読み取れること、考えられることを問うような問題を出題し、生徒の読解力を判断しています。例えば、ペルシア戦争の原因を問う設問では、試験問題に教科書本文をそのまま掲載し、その文中から原因を読み取らせ、該当部分を書き出させます。

その上で、③証拠（評価方法）が生み出されるような学習方法を考えます。定期考査の内容を踏まえ、私の授業では、世界史の教科書を読ませ、そこから重要なことを書き出したり、重要事項を組み合わせて自分の考えを書いたり、発表したりすることが中心となりました。また、生徒の読解力には差があるので、グループワークを中心とし、生徒が互いに学び合う場面を多く設けるようにしました。ほかにも、個人で論述した文章を、ルーブリックで相互評価させる機会も設けています。

そして最後に、④生徒が学ぶこと（学習内容）について考えます。

Q 読解力の育成に注力した授業を行って、授業の進度に遅れは出ないのでしょうか。

A 授業の進度は守るようにしています。ただ、教科書の内容を網羅的に扱うのではなく、特にどの内容で読解力を発揮してほしいのかを踏まえて、授業を設計しています。私の授業では、単元ごとに大きな問いを提示し、生徒は、教科書や用語集などを読解しながら、問いの答えを探します。1つの単元内でも時間をかける部分と、そうでない部分を決め、進度を調整するようにしています。

そう考えるようになったきっかけは、前任校で担当した研究授業の時の出来事です。授業の進度のこともあり、一方的に生徒に講義したところ、授業後、先輩から「生徒に考えさせる時間をつくってもよいのではないか」とアドバイスをいただきました。生徒が考えるからこそ、授業理解が深まるのだと、その時初めて気づいたのです。

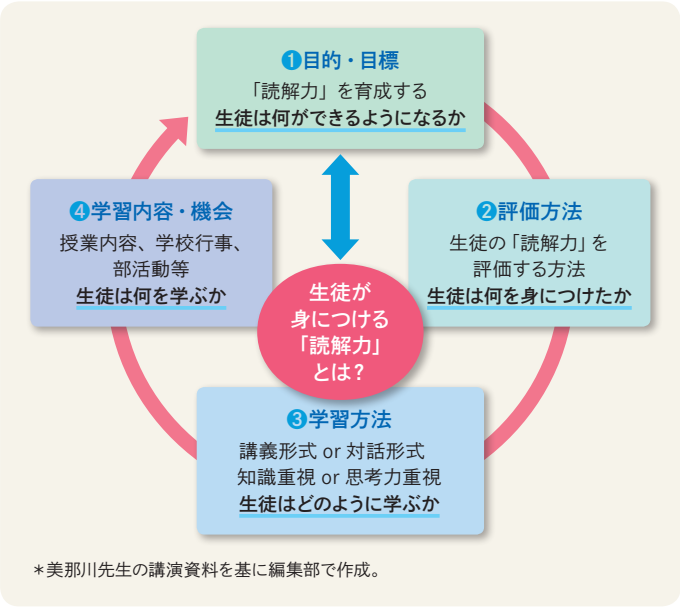
それからは、授業内容の「核」となる部分、最も「面白い」ところは、私が説明せず、たとえ時間がかかっても、あえて生徒に考えさせるようにしています。

教育目標を軸にして、どこに重点を置いて生徒に考えさせるのかまでをイメージし、3年間の授業計画をデザインすることが、効果的なカリマネの実現につながるのではないでしょうか。

Q 授業改善により、生徒の読解力がどの程度伸びたか、どのように測定していますか。

A 読解力を求める問題を定期考査で出すほか、外部の模擬試験を活用していく予定です。試験問題の中から、解く上で読解力が求められる問題を指定して、どの程度育成されたのかを検証することを考えています。

図3 逆向き設計に基づいた授業設計の概念図



＊美那川先生の講演資料を基に編集部で作成。